

メモリーズ・オブ・セレベス ～洋画家・庄司栄吉の太平洋戦争～

2005年春、一人の老画家が太平洋戦争中にセレベス(インドネシア・スラウェシ島)で描きためたスケッチや油絵を編んで一冊の画集を出版した。その画家は庄司栄吉。日本を代表する洋画家の一人である。彼は60数年前、日本帝国海軍派遣教師としてセレベスに赴任し、日本語と美術を教え、米軍の爆撃下で教え子たちとともに2年半あまりを過ごした。画集を出版して今一度、彼の地を訪れ、教え子たちとの再会を望んだ。インドネシア、スラウェシでは教え子たちもショウジセンセイとの再会を熱望した。

「メモリーズ・オブ・セレベス」は、庄司栄吉が88歳の高齢をおして臨んだ60年目のセレベス再訪の旅を記録したドキュメントである。

あらすじ

2006年1月末、長い歳月に黄ばんで擦り切れた2冊のノートを持って庄司栄吉は60年ぶりにセレベスの地を踏んだ。そのノートは教え子たちとの絆であった。まっさきに、教鞭をとった男子中学校や女子中学校、師範学校を訪ねた。再訪を知った教え子たちが校門の前で待っていた。60数年前の記憶を教え子たちに導かれて手繰り寄せていく。

朝礼、ラジオ体操、勤労奉仕、朝のマラソンや駆け足。次から次へと教え子たちが中学校時代を語り始めた。

「私たちは、日本から精神、規律正しさを学びました」

学校を訪ねながら教え子たちと暮らした2年半の足跡を辿っていく庄司栄吉。脳裏に慄然とした記憶がまざまざと甦る。

連日見舞われた米軍の空襲。農業学校が爆撃され、防空壕に逃げ込もうとして直撃を受けて死んだ大勢の生徒たち。確かにそこは戦場であった。そして、教え子たちの数人が当時、自分たちを襲った戦争とその傷を語り始めた。それは、庄司栄吉が60年目にして始めて知る事実であった。



戦後60年、日本は未だにアジア各国、各国民との間に戦争を乗り越えて平和と友好の礎を築けないでいる。そうした現実を見据えたとき、セレベスで教え子たちとともに戦争を生き抜いた一人の画家の生き様に、日本が、日本人がアジアとの間に友好と平和を築き上げるための信頼関係を回復する一つの手がかりを見い出すことができるのではないかと、考えている。

監督 中津義人



配給
販売 **オフィススリーウェイ**

〒145-0074 東京都大田区東嶺町39-4

TEL 東京03 (3759) 8220 (中津)

FAX 東京03 (3759) 7920 (中津)

E-mail: nakatsu@mxh.mesh.ne.jp

http://www.office3way.com